

主題	姿勢が変わるとこんなに変わる
副題	芦花ホーム姿勢チームの取り組み
シーティング	多職種協働

研究期間	12カ月	事業所	世田谷区立社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム
発表者：八木橋耕 和田貴		アドバイザー：	
共同研究者：石井啓之 相馬善之 水谷俊幸 三木広史 佐藤康子 三浦洋子 佐藤みゆき 小野明子 宮澤貴之			

電話	03-5317-1094	メール	rokaj@setagayaj.or.jp
FAX	03-5317-1090	URL	http://www.setagayaj.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設では、利用者一人ひとりへの個別ケアを重視し、食事・入浴・排泄などの日常生活の介助、機能訓練、健康管理など、生活全般を支援している。また、ボランティア活動の支援・介護技術講座等の開催・教育機関との連携・福祉人材の育成など多角的な交流を通して、区立施設として地域社会に貢献しており、特に看取り介護・口腔ケア・認知症ケア・姿勢ケアに力を入れて取り組んでいる。
------------------	---

### 《1. 研究前の状況と課題》

芦花ホームでは平成23年度事業計画の中で「シーティング・ポジショニングを実施し、利用者にとって安楽な姿勢で自立的生活ができるよう支援する」を掲げた。

その背景には、姿勢に対する意識や知識が不十分であったこと、良い姿勢を周知する方法と手段が無くて職員によってケアのばらつきが生じていたことがあった。

個別性に応じた「利用者にとっての良い姿勢」を考えるにあたって、どのように検討し評価するか、サービスの質の標準化を図るために職員へどのように周知していくかが課題として挙げられた。そのためには、職員の姿勢に対する理解や、意識の向上も必要であると考えた。

また、介護士だけでなく多職種による関わりがなければ、自立的生活の支援は困難であると考えられた。

以上のような理由から、介護士・看護師・理学療法士による姿勢チームを立ち上げ、多職種協働による姿勢ケアに取り組んだ。

### 《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

姿勢チームでは、利用者一人ひとりの姿勢を見直し、シーティング・ポジショニングを実施することで、その方にとっての「良い姿勢」を整えて、身体痛の軽減や褥瘡の予防、食事の自力摂取や誤嚥防止などを目指した。

また、チームの取り組みを周知していくことで、職員にも「良い姿勢」をみてもらい、姿勢に対する理解の向上を図った。姿勢の変化から利用者の活動の変化を感じてもらうことで、職員全体の意識の向上につながることを期待し、目的とした。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

芦花ホームでは、平成23年度に入居者100名中、44名の利用者について、シーティングとポジショニングを実施した。具体的な取り組みは以下のとおりである。

#### ①対象となる利用者の選定

姿勢の検討が必要と思われる利用者を出し、選定する。

#### ②姿勢チームでの「良い姿勢」の検討

利用者が生活を行っていくうえで必要と思われる場面（ベッド上臥位や車椅子座位など）ごとに「良い姿勢」を検討し、適切な椅子やクッションを用いて調整する。

#### ③個別シートの作成と周知

検討した「良い姿勢」について、見ただけでわかるような写真付きの個別シートを作成する。フロア全職員が同様に実践できるように、リストの作成や申し送りへの追加などで周知を行う。

#### ④評価

評価期間を設けて、検討した姿勢について観察・記録を行う。生活の中での不具合の有無について姿勢チームで評価し、必要な場合は再検討を行う。

本研究では、3名の利用者を選定し、上記の取り組みにおいて得られた効果を検証した。また、職員へのアンケートを実施し、姿勢に対する意識の変化について調査を行った。

### 《4. 取り組みの結果と考察》

普通型車椅子にて立ち上がりなど落ち着きがみられなかった方が、座面調整を行ったことで落ち着かれて、他者との交流など楽しみの時間を持てるようになった。

リクライニング車椅子上で姿勢が崩れて、全介助で食事摂取していた方が、車椅子をテイルト型へと変更し姿勢が安定した。食事の介助量が減少し、自力摂取の場面が増え、活気も向上し様々な訴えも増えてきた。

車椅子上で身体の傾きや傾眠が目立ち、食事もほぼ全介助であった方が、食事の際に調整された椅子に移乗することで傾きが減少し、食事も自力摂取できるようになった。

アンケートから、職員ごとに当て方が一様でなかったクッションの種類や位置が統一され、椅子・車椅子上にて過ごされる利用者に対する「座り直し」が習慣化したなど、利用者だけでなく職員の変化もみられた。

### 《5. まとめ、結論》

シーティング・ポジショニングを実施し「良い姿勢」を整えたことにより、身体面や生活面において良い効果が得られた。

アンケートの結果、ほとんどの職員が利用者への良い効果を実感しており、姿勢に対する意識の向上もみられた。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に口頭にて確認を行い、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《8. 提案と発信》

姿勢を直す意味と目的を明確にしたうえで「良い姿勢」を検討し、情報を共有してサービスの質の向上を図ることが必要である。そのためにも多職種が連携し、利用者の「良い姿勢」に対する職員意識の向上を図り、利用者一人ひとりが「より良い姿勢で、より良い生活」を送ることが出来るよう支援していかなければならない。

【メモ欄】